

『午前十時 (04/02)』

土曜日の十時です  
春の日はけだるいです  
風が空中をなでています  
鳩が二羽飛んでいます

土曜日の午後一時です  
春の日はどんよりです  
お空は雲に隠されています  
火の見矢倉が屋根を見えています

私は疲れて眠ります  
きつとよい夢が  
私を包むことでしょう  
きつとね……きつとね

『暗闇 (04/03)』

黒いビロードの  
カーテンで  
総てを包んでしまおう

暗黒の闇

正直者には  
一日の疲れを癒す  
眠りの精が降りてくる

権力者には  
苦悶と眠りのない  
時間が始まる

あなたはどちら  
あなたはどちら

どんな人でも  
時間がくれば  
必ず死ぬのです

一日の闇が降りてきたら  
さあ  
眠りの精に任せましよう

さあ

『会話 (04/06)』

あのね樹木の  
みなさん  
なにをそんなに  
楽しそうに  
話しているのですか

風さん風さん  
なにか嬉しいことでも  
あるのですか  
向こうの菜の花畑で  
蝶さんと遊んでいたでしょう

小鳥さん小鳥さん  
空の高いところから  
ここはどうなふうに見えるのですか  
ねえねえ聞かせて下さい

みんなみんな  
なにを話しているのかな  
どうして人間には  
聞こえないのかな  
ねえねえ如何してなのかな

『桜 (04/08)』

咲きましたね  
満開に見事ですね  
桜並木は  
どこも人の宴会で  
この冬の冷たさを  
捨てているんですね

桜色ですか  
一斤染ですか  
ベビーピンクですか  
年輪をそれぞれ染めた  
一片一片が風に舞って  
今年も咲きました

陽を浴びて  
人生の思い出語りを  
人生の夢語りを  
そうですよ  
桜吹雪の宴の舞を  
忘れてはいけませんよ

『闇 (04/10)』

何もかも  
暗黒の世界へと  
塗り潰す  
闇の黒き世界

人の悲しみも  
人の愛しさも  
人の恋しさも  
人の辛さも

闇に消して  
切なる人の心を  
明日へと追いやる

闇のカーテン

『風 (04/13)』

ひゅーっ  
家の戸をきしませて  
風が吹いています

ヒューーっ  
野原の上空を  
風が吹いて行きます

微風の微笑みに  
和んだ灯火の心は  
荒れた風に  
身を震わせて祈ります

ひゅーっ  
野原の上空を  
風が吹いて行きます

ヒューーっ  
家の戸をききませて  
風が吹いています

『灯 (04/15)』

窓の向こうの  
暗闇に小さく  
点灯している  
人家の灯火よ

汽車はガトゴト  
音を発てて走っています  
ピーと警笛を鳴らして  
一目散に進んでいます

暗闇の人家の  
灯火が恋しいのです  
一日を終えた  
安堵と憩が恋しいのです

暗闇にじっと  
点灯している  
憩の明かりよ  
人家の灯火よ

『夢 (04/21)』

夢を見ました  
砂漠の中に一人  
立っている自分の夢を

夢を見ました  
一人で泣いている  
自分の幻を

夢を見ました  
起きたら  
忘れてしまいました

一人居の部屋の中で  
昨日も今日も明日も

一人で眠っています

夢を見ました  
自分の夢を  
一人居の部屋で

『いつか (04/22)』

いつかきつと愛をつかむ  
ことがあるのだろうか  
愛を失った心が

いつかきつと幸せを  
手にすることが  
あるのだろうか

私の人生よ  
私の生きよ  
私の心よ

いつかきつと愛を  
手にすることがあろうか  
消えそうな私の人生が

それでも  
いつかきつとキラリと  
光る宝石を刻みたい

私の人生よ  
私の生きよ  
愛しい私の心よ

いつかきつと愛を  
どこかでつかむことが  
出来るだろうから

いつかきつと  
どこかでつかむことが  
出来るであろうから

『日 (04/28)』

久しぶりに  
遠くの町へ  
行ってきたのです

良いですね  
山河がある町は

良いですね  
緑の風うねりは

久しぶりに  
山河や雲へ  
思いが飛びました

良いですね  
瓦のある家並は

きつと詩の

ある町なのです

久しぶりに  
心の部屋へ  
自然がきたのです

End all 1994/04

『楽しみ (05/01)』

たった一つの  
私の楽しみ  
それは  
詩を書くこと

たった一つの  
楽しみ  
それは詩を  
書くこと

だって何も  
なんにも  
わからないから  
寂しいけど

本を読んでも  
難しすぎて  
解らないから  
悲しいけど

たった一つの  
私の楽しみ  
それは  
詩を書くこと

『森の中 (05/09)』

深い森の中に  
一軒の家が有ります

鬱蒼とした木々と  
赤いトタンの屋根が

目を上の方へやると  
枝葉が風に揺れています

上空の青空と陽が  
キラキラ斑いています

男は森の空き地で  
トントんと薪を割っています

女は家の前で  
一心に剪定しています

鳥のさえざりとリスが通り  
風がひんやりとすぎて行く

男はトントんと  
カマドの薪、風呂の薪

女は脚立を移動して  
二本目の若木取り組んでいます

森の中は今日も静かで  
暗くなった食卓はきつと

明かりに照され神への祈りと

無事の祈りの慎ましいのでしょうか

『闇の中 (05/19)』

夜の部屋で一人  
神様に祈りを捧げています  
：どーか助けてください…と  
神に祈りを捧げているんです  
生きていることが  
辛くて・苦しくて・痛くて  
生きていることが  
たまらなくて・どうしようもなくて  
悲しくて・やるせなくて  
神様に助けて下さい…と  
一心に祈りを続けているんです

一人いの部屋で私は  
神に祈りを捧げているんです  
誰にも言えない苦しみを  
一心に神に祈っているんです  
誰にも言えない悩みを  
一心に神に祈っているんです  
：助けてください…と

それから詩を書いて  
詩を書いて詩を書いて  
それでも私は神様に  
祈らずにはいられないのです  
：助けてください…と

どうしようもなく痛くて  
どうしようもなくそれがつらくて  
生きているのがどうしようもなく  
なんにも見えないから  
なんにもわからないから  
希望も夢もみーな消えそうだから  
詩を書いて詩を書いて  
もう消えそうなのです  
一人いの部屋で私は  
神様に祈りを捧げています  
：どーか助けてください…と

『心の中 (05/31)』

心の中は  
いつも  
淋しい海

太陽は見えないし  
時として映るは荒海  
舟の影すらなく  
波の動きだけの世界

心の中は  
いつも  
淋しい海

希望は見えないし  
心に映るは暗黒の海  
安ろう漂いはなく  
波だけが動いて行く

心の中は  
いつも  
淋しい海